

品中々人力ニては漁事難相成趣御座候、足を鰐ニ喰切られ浮出候を取上候由ニ而三切ニ致し、去月廿二日本小田原町一丁目尾張屋次右衛門方へ乗込候旨、尤其節温氣ニ而日數相立多くハ腐候而、取捨候由ニ相聞申候、依之別紙魚繪圖面入御覽申候、此段申上候、以上、

子十一月朔日

町奉行

猶以眞鳥賊ニ而者無御座候、あをりいかに御座候哉、長サ貳間半、横六尺餘、足之九サ貳尺程、略圖

〔牛馬問四〕一客有て夜話す、一人が曰、我船而海邊を過るに、舟郎が曰、希見事こそ候へ、各見物し給へとて船をとむ、其指す所を見れば、大なる蛇岸に臨て水中を窺ふ、水中よりは大なる鳥賊岸に向て蛇を取らん、の勢ひ有、兩物間近く成ければ、鳥賊波を汲墨を嘔て、彼の蛇にそゝぎかくれば、蛇は斷々にきれて、海中に落、見るもの奇と感せざるはなし、其後又他に往て夜話す、客の曰、近き比或人鳥賊を料理するに、彼もとより庖丁の業に疎ければ、鳥賊をあらふの方をえらす、腹中の墨やぶれ手を添所ことごとく黒く、殆アツク儼はてたる折から、彼が兒アツク蝮にさ、れたるとて泣叫、其親大に驚あはて、彼鳥賊を捨て走寄、黒き手も不厭、そこ歟こ、歟と撫摩て、いたはるほどに、此兒も眞黒になりて、痛む所も見へざるに、疼暫時の間に愈て、泣をとめ、遊ぶ事常のごとし、皆人不足し、鳥賊の墨、蝮の毒を解哉といへり、此兩人の話に、鳥賊の墨、諸蛇の毒を解する事疑ひなし、本草に鳥賊骨海蝶蝮蝮螭整疼痛を治とあれども、墨の能を不載、姑く書して後人に備ふ、

海月

〔本草和名十六〕海月中、故以名之、凝月煮時即凝、一名水母水母者、蛇名、形如覆笠、無目、蝦入其頭中、爲目、出崔禹、和名久良介。

〔倭名類聚抄十九〕海月 崔禹錫食經云、海月一名水母和名久良介、貌似月在海中、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄八〕訓久良介、依輔仁、新撰字鏡、螭同訓、古事記久羅下、即是、略中、本草和名引同、興化府志云、博物記云、晨風爲鷗、海月爲水母、與崔氏所云合、文選江賦、海月水母兼舉、注引南越志